**井伊家と彦根藩**

**井伊家**

徳川時代（1603〜1867）は、将軍と呼ばれる武将（大名）による世襲制よって支配された。徳川幕府は、「大名」と呼ばれる全国の土地を支配している武将の服従と体系化された多くの藩による課税制度に基づいていた。各藩は大名と呼ばれる役人によって統治された。大名とは、強力な（武）家の棟梁に幕府から与えられていた世襲制の地位であった。大名は自身の藩に対して大きな権限を持っていた一方、土地は幕府によって評価・課税された。また各大名は必要に応じた幕府への軍事支援、および江戸（現在の東京）への参勤交代を義務付けられていた。1600年、井伊家は彦根藩（現在の滋賀県の一部）の領主となり、1606年から1871年まで彦根城に居住した。

井伊家は初代将軍である徳川家康（1543-1616）の日本統一をサポートし、徳川政権内でかなりの権力を握った。将軍が政治上の問題を委任することを余儀なくされたとき、将軍は首相のような機能を持った高官である大老に相談を行った。井伊直孝（1590–1659）は1632年に大老に就任した。徳川時代に大老として将軍を支えた9人のうち4人が井伊家の藩主であった。

**彦根藩**

彦根藩は、1600年に井伊直政（1561〜1602）の領土として始まった。同年の日本統一をかけた重要な関ヶ原の戦いでの功績が認められた結果であった。彦根は商業的にも戦略的にも琵琶湖に位置する豊かな農業地域であり、首都である江戸と西日本を結ぶ2街道の1つである中山道の要所としても重要であった。彦根藩は約30万石の収入を持つ富裕な領土であり、1年で30万人の成人男性を養うのに十分な石高であった。

**彦根城**

井伊氏は幕府の命令により、1604年に彦根城の建設を開始した。幕府初代の徳川家康は、西国の反幕府大名による攻撃の可能性を考慮して防衛網を確立したかった。櫓を含む城の主要部分は1607年に完成した。建設は国の覇権を確実なものにするための大阪の陣（1614〜1615）において井伊家が家康をサポートしている間、一時的に中断したが、堀を含む城全体は1622年に完成した。